



平成18年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」採択

岩手大学

「持続可能な社会のための教養教育の再構築」

# 『学びの銀河』プロジェクト

## 最終報告書 (平成18年10月～平成21年3月)

Project “Galaxy of Learning” : The Last Report

- 1. プロジェクトの目標と取組
- 2. 年度別の取組実績
- 3. 第3回 評価委員会の記録

平成21年12月

岩手大学

IWATE UNIVERSITY

---

## はしがき

この報告書は、平成18年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択された岩手大学「持続可能な社会のための教養教育の再構築：『学びの銀河』プロジェクト」の活動をまとめたものです。岩手大学は、平成16年4月の国立大学法人化と同時に、大学教育センターを立ち上げて、教養教育の充実に向けた取組を開始しました。これは、平成12年度から始まっていた改革の延長線上にあるものですが、教養教育改革としては全国的に見て早い段階の取組であったとすることができます。

とはいえ、岩手大学の教養教育改革が順調に進んだというわけではありません。戦後の日本の大学教育において教養教育ほど論議を呼んできたものはありません。本学においても改革案に対して実に様々な議論が噴出し、收拾がつかない虞もありました。そうした事態を打開するためには、今日の社会における教養教育の意義と使命を再定義し、明確な「旗印」を提示することが必要と考えられました。

この認識に基づいて、平成17年から始まっていた国連の「Education for Sustainable Development : ESD（持続可能な開発のための教育）の10年」を教養教育改革の「旗印」とする提案がなされたのです。それ以降、教養教育改革はESDをめぐる議論と並行して進められ、平成18年4月の「現代GP」への申請に至りました。

この報告書には、平成18年4月に文部科学省へ提出した申請書をそのまま収録しました。中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」（平成17年1月）が提示した「21世紀型市民」の育成を正面から受けとめ、それとESDを連結して教養教育の再構築を提示しました。この申請が採択され、平成18年10月から平成21年3月までの2年6ヶ月間、実に様々な取組を進めてきました。その取組の詳細は、「年度別の取組実績」にまとめてあります。最後に、第3回評価委員会の記録を収録しました。

当初、計画したESD副専攻の設置は果たせませんでした。それに代わるものとして平成21年度の環境省「環境人材育成のための大学教育プログラム開発事業」の採択へ結びつけることができました。これからは、ESDの核となる環境教育の充実を図りながら、一回り広いESDの多様な取組を相互に交流し、教養教育の充実に向けて地道な努力を続けることが課題です。また、今後とも幼小中高大専ESD円卓会議など、本学から出発したネットワークを大切にしていける必要があります。

最後に、この取組がESD推進委員会や大学教育総合センターなどの、実に多くの教職員の献身的な努力・協力の下に実施できたものであることを改めて確認し、心よりの感謝の意を表します。

平成21年12月28日

取組実施責任者

玉 真之介

---

---

## 目 次

1	プロジェクトの目標と取組	1
2	年度別の取組実績	7
	(1) 平成18年度の取組	7
	(2) 平成19年度の取組	12
	(3) 平成20年度の取組	17
3	第3回ESD評価委員会の記録	23
	現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）実施状況報告書	39

# 1 プロジェクトの目標と取組

プログラム申請書(2006.4)から再掲

## (1) 取組の概要

- 1) 持続可能な社会づくりには環境問題に加えて他の社会・経済問題に対する理解と問題解決の行動が求められることから、これまでコアカリキュラムとしてきた環境教育科目に加えて、すべての教養科目にESD(「持続可能な開発のための教育」)を織り込み、教養教育を「21世紀型市民」育成のための教育プログラムとして再構築する。
- 2) ESDのコアを「尊重の価値観」として、4つの領域と「関心の喚起」から「問題解決の体験」までの4つのタイプによって教養科目を構造化し、履修科目選択を星座に譬えてイメージさせ、複眼的視野の育成を図る(「学びの銀河」プロジェクト)。
- 3) 学外の団体と協働して県境の産廃問題など、地域の具体的な問題をテーマとする高年次教養科目を新設する。
- 4) 各学部の専門科目にもESD科目を認定し、教養教育と専門教育を横断して、持続可能な社会づくりに主体的に参画する人材を養成するESD副専攻を立ち上げる。

## (2) 取組の趣旨・目的

### 1) 取組の目標

中教審答申「我が国の高等教育の将来像」が述べるように、大学は改めて人間形成の場であることを自覚し、専門性のみならず、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持した社会を改善していく人材(=「21世紀型市民」)の養成が求められている。そのためには、教養教育を従来型の縦割りの学問分野による知識伝達型教育ではなく、専門分野の枠を越えて、人間としてのあり方や生き方、現実社会とのつながりを正しく理解する力を涵養するものに再構築していかなければならない。

また、国連「持続可能な開発のための教育の10年(ESDの10年)」で提起されているように、持続可能な社会づくりのためには、環境のみならず、社会、経済、文化などをはじめとする極めて幅広い分野を包含する総合性と、価値観や倫理性を地域の具体的課題の体験などを通じて養成する実践性の両方を兼ね備えた教育プログラムが必要となる。

これを受けて本取組は、これまで事実上のコアカリキュラムとしてきた環境教育科目に加えて、すべての教養科目にESD(「持続可能な開発のための教育」)の考え方を織り込むと共に、教養科目相互のつながりや現実社会とのつながりを理解できる仕組み(「学びの銀河」)を組み込むことによって、教養教育を持続可能な社会づくりの行動につながる「21世紀型市民」育成のための教

育プログラムとして再構築することを目標としている。また、それを踏まえて教養教育と専門教育とをESDで結び、本学の教育目標にある「環境問題をはじめとする複合的な人類的諸課題」に専門性を生かして主体的に参画する人材養成のための全学的な副専攻を構築することがもう一つの目標である。

## 2) 取組が養成しようとする人材像

この取組によって養成しようとする人材像は、社会の各分野で専門性を生かして活躍するのみでなく、環境問題をはじめとする複合的な人類的諸課題を生涯にわたって自らの課題として意識し続け、社会・地域・家庭の様々な場で、身の回りの具体的問題の解決にコツコツと取り組むような「21世紀型市民」である。

その際、持続可能な社会づくりには、環境問題をはじめとする地域の具体的問題について、専門家や市民、行政、企業などの様々な主体が自発性、自主性を互いに尊重しながら分野の違いを超えて協力していくことが特に重要である。そこでは、活動の参加者の自発的な行動を上手に引き出すファシリテーターや、様々な人と組織の調整やネットワークづくりを行うコーディネーターの存在が欠かせない。

本取組が養成する人材は、持続可能な社会づくりという問題意識をしっかりと持って、多様な主体が互いを尊重して協力し合うことの重要性を理解し、自らの専門性も生かしながら活動に主体的に参画し、社会が求めるファシリテーターやコーディネーターへと成長していくような人材である。

## 3) プログラムの成果と効果

本取組から期待される成果は、専門教育に比べて抽象度が高く、分野も幅広い教養教育について、ESDを織り込むという独自の手法と新たな仕組みによって、教育内容と教育方法の改善に統一的な方向性を与え、担当教員の漸次的な共同作業によって教養教育全体の構造化と可視化を実現することである。それにより学生は、履修科目間のつながりや現実社会とのつながりの理解が容易となり、教養教育を履修する意欲が高まるとともに、教養教育と専門教育の双方が持つ意義に対する理解を深めることが期待できる。

このことは、大学の教育改革において、教員の意識と学生の関心の両面から、その充実が難しい教養教育に対して、新しい改革のモデルを提示するものであり、「21世紀型市民」の育成という大学が改めて目標とすべき学士課程教育についても、教養教育と専門教育をつなぐ新たな方法として他大学の教育改革に対して刺激となり、参考となるものである。

また、外国のESDに取り組む大学と積極的に交流して世界的な動向をキャッチして紹介するとともに、地域における小中高校との間でも場をつなぎ、主体をつなぐ環境教育の事例を提供して、新しい環境教育の多様な展開に貢献するものである。

### （3）取組の実施体制等（具体的な実施能力）

#### 1) 教育課程と教育方法

先に掲げた目標を達成するために、本取組では第1に、初年次の転換教育（初期ゼミ等）を含む全学共通教育のすべての科目にESDを織り込むという指針を掲げ、すべての教員の共同作業として漸進的に教養教育の再構築を図る。その際、ESDのコアである「尊重の価値観」について、岩手県其自然や風土、そして本学とも関係の深い宮沢賢治の思想を重ね合わせて、それを「思いやる心」と表現し、各教育科目が本学の教育目標にある「高い倫理性」を意識するように努める。

→（取組①）

第2に、ESDの総合性を環境(E:environment)、社会(S:society)、経済(M:market economy)、文化(C:culture)の領域で示すことに加えて、その実践的性格を「関心の喚起」(タイプ1)、「理解の広がりと深化」(タイプ2)、「学生参加型」(タイプ3)、「問題解決の体験」(タイプ4)という新しい指標で示し、履修する学生が専門分野の枠を越えて科目相互のつながりや現実とのつながりを理解できるようにカリキュラムの構造化と可視化を図る。その際、各領域が「思いやる心」を中心に重なり合う様子を銀河系に譬え、各領域に位置する各科目を星に譬えて、学生には領域とタイプの異なる星を線でつないで自らESDの星座を作るイメージを提示し、それを「学びの銀河」と呼ぶことにする。→（取組②）

第3に、学外の行政、NPO、さらに小中高校と協働して環境問題をはじめとする地域の具体的な問題について、フィールドワークを含むタイプ4の**高年次教養科目**（3年次、4年次）を新設する。そこでは、津波対策や岩手山噴火対策などで培ってきた「**地域防災**」、県境の産業廃棄物対策の実績に立つ「**環境再生**」、北上川清流化対策以来の「**流域連携**」、学内ミュージアム化などの「**教育エコキャンパス**」などの岩手県や岩手大学独自のテーマを選び、地域における実践活動と相互交流を図るとともに、地域の小中高校とも積極的に連携を行う。→（取組③）

第4に、4つの学部**の専門科目**についてもタイプ3、タイプ4のESD科目を認定し、教養教育と専門教育を横断してESD科目を一定単位以上履修した学生に履修証明を与える全学的な**ESD副専攻**を立ち上げる。その際、ヨーロッパやアジアなどの外国の大学におけるESDプログラムとも積極的に交流する。→（取組④）

#### 2) 実施体制等

取組①②は、本学の**大学教育総合センター**（専任教員3名）の**全学共通教育企画・実施部門**（専任教員1名、兼務教員8名）が企画と実施の中心となる。本センターは、学務担当理事・副学長がセンター長を務め、全学の関心・協力の下に全学共通教育（教養教育と共通基礎教育）の企画と実施を重要な任務として平成16年に設立された組織である。

取組③④は、それぞれの分野で実績のある教員の協働が不可欠であることから、学務担当理事・副学長を長とし、各学部及び大学教育総合センターから関係教員を集めて**ESD推進委員会**を組織し、**教育推進本部**の専門委員会と位置づける。この教育推進本部は、大学教育総合センターが進める全学共通教育のみでなく学部の専門教育を含めて大学の教育改革を戦略的観点から方向付ける組織であり、4人の理事（学術担当、学務担当、地域連携担当、財務・労務担当）と4学部

長（人文社会科学部、教育学部、工学部、農学部）及び学務担当理事室員によって構成され、本部長は学務担当理事・副学長である。

以上のように、本取組は学長並びに教育推進本部の統括の下で、取組①②については大学教育総合センターが、取組③④については、ESD推進委員会が大学教育総合センター及び各学部と協力して実施にあたる。

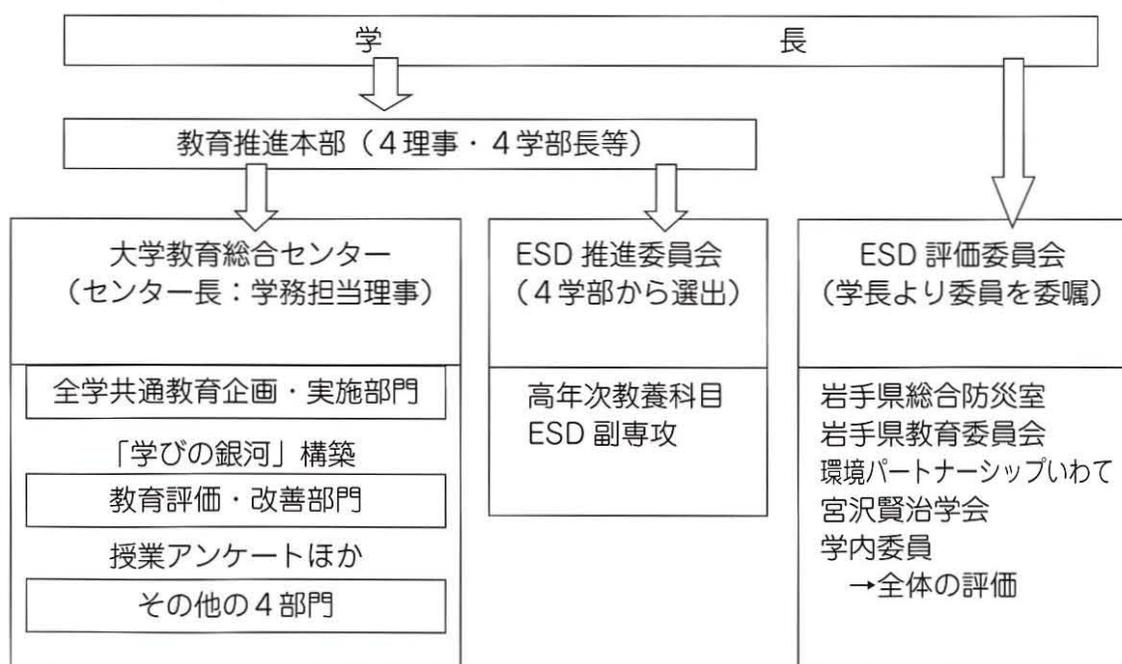
### 3) 本取組の独創性、新規性

教養教育の充実方策については、これまでコアカリキュラムの設定が有力な方法として提示されてきた。これは、教養教育が1つ1つの科目は優れた内容でも、科目相互の関連性が明確でなく、結局は知識の断片を習得するにとどまる傾向があったからである。本学でも、環境教育科目を事実上のコアカリキュラムとして一部学科を除いて必修としてきた。しかし、いま求められているのは、環境と社会・経済・文化とのつながりに対する理解であり、現実の社会を改善していく実践性である。

その点で、ESDを教養教育に織り込み、領域とタイプ分けによって専門分野を超えた総合性と実践性を可視化するという本取組は他には見られない独創的なものであり、また教育内容や教育方法の改善に方向性を与えるという点も教養教育のFD活動において新規性を備えている。

また、専門性を習得しつつある高年次の学生が地域の具体的問題について学部を越えて一緒に学ぶ高年次教養科目の新設は、現実社会との交流という実践性にとどまらず、専門分野による観点や方法の違いを理解し、互いを尊重しながら協力するコーディネート能力を養成する科目として新たな可能性を秘めている。

### 実施体制と評価体制



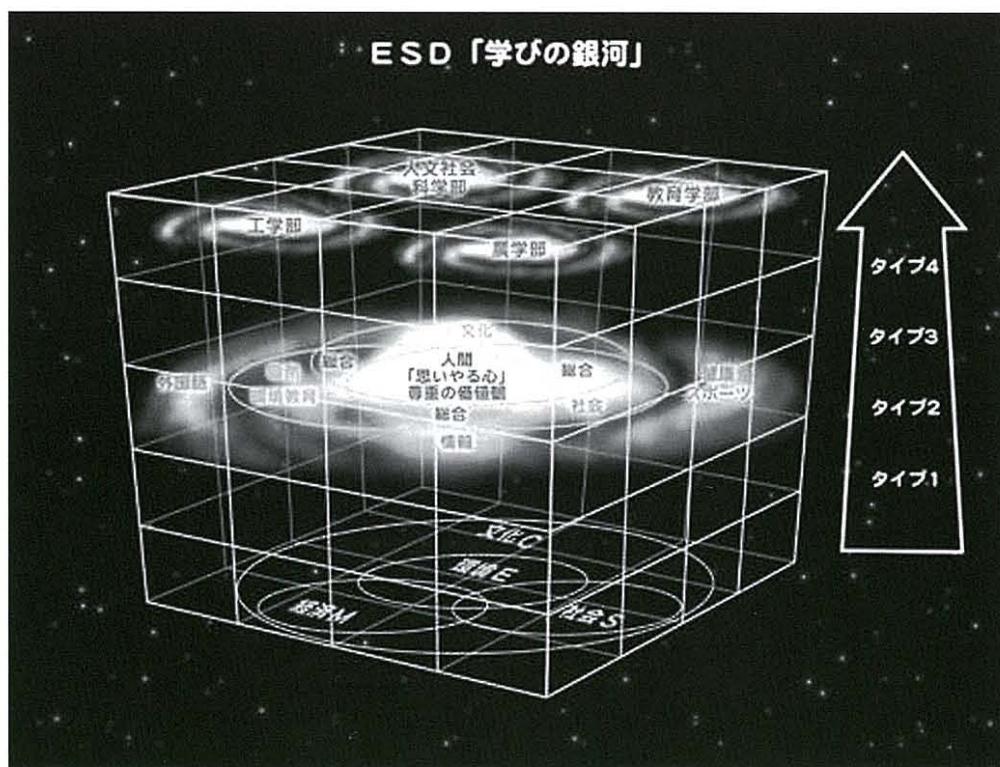
#### 4) 評価体制等

本学の大学教育総合センターには、**教育評価・改善部門**（専任教員2名、兼務教員8名）があり、全学共通教育についての学生授業アンケートの解析や優秀授業表彰、年2回の授業公開、年1回のFD合宿研修、毎月の授業改善セミナーなどに取り組んでいる。本取組においても、取組①②については、この部門が中心となって学生授業アンケートにESDについての質問項目を加えて、「学びの銀河」の趣旨が学生にどのように受け止められ、履修科目間のつながりや現実社会とのつながりの理解について分析し、その結果を全学共通教育企画・実施部門と共有して改善につなげる。

取組③④については、学長から岩手県総合防災室、岩手県教育委員会、NPO法人環境ネットワークいわて、宮沢賢治学会イーハトーブセンターに委員の選出を依頼して、学内の委員と合わせてESD評価委員会を設置し、継続的な情報提供と定例の委員会開催を通じて、取組の全体について毎年、評価意見をもらい取組の改善に活用する。

#### 5) 教育改革への有効性

本取組では、教養教育を担当する教員の間でESDが意識されることで、教育内容と授業方法の改善（FD）に方向性が与えられ、年を追うごとに分野相互のつながりも深まっていくことが期待できる。これにより履修する学生は、教養教育の目指す目標や現実社会との関係、教養教育を受ける意味や履修科目の相互関連、専門科目との関係等々の理解が容易となり、教養科目を学ぶ意欲の増進につながる。



第2に、ESDのコアである「尊重の価値観」に宮沢賢治の思想を重ねることで、地域の自然や風土に根ざした文化が教養教育に取り込まれ、独自教材の開発などを通じて教育の個性化が図られると共に、学生も地域や大学に対して関心を高め、それが学生の自己形成に寄与することが期待できる。

第3に、環境問題などの地域の具体的課題について、学外の行政や環境NPO、小中高校との協働による実践的な教養科目の開設によって、これまで研究面で定評のある地域連携に加えて教育面でも地域との相互交流が深まり、学生の地域理解を高めることもできる。

第4に、ESD副専攻の開設により、学生に複眼的な視野を持つ履修に意欲を与えるとともに、「教養教育と専門教育との調和」という教育目標を具現化し、全学的な教育改革に結びつけることができる。

本取組の成果は、他大学に対して教養教育のFD活動に新しいモデルを提供するだけでなく、教養教育と専門教育を総合的に見直し、中教審答申が求める「21世紀型市民」の育成という課題に応じて教養教育を充実させる1つのモデルを提示する。

# 2 年度別の取組実績

## (1) 平成18年度の取組

### 1) ESD推進委員会の設置

GP事業の推進を図るため、学内有志による「岩手大学ESD推進委員会」を設置し、以後、GP事業推進の中核組織とした。

ESD推進委員は下記の通りである（平成18年度～20年度。途中の入退を含む）。

人文社会科学部	牧 陽之助、開 龍美、家井 美千子、海妻 径子
教育学部	宇佐美 公生、松葉口 玲子、梶原 昌五
工学部	船崎 健一、南 正昭、高木 浩一
農学部	橋本 良二、鈴木 忠彦
連合農学研究科	比屋根 哲
大学教育総合センター	玉 真之介（委員長）、岡田 仁、山崎 憲治、後藤 尚人 江本 理恵、福永 良浩
国際交流センター	松岡 洋子

回	開催日
1	2006年10月26日
2	2006年11月30日
3	2006年12月21日
4	2007年1月18日
5	2007年2月15日
6	2007年3月8日

## 2) ESD銀河セミナーの開催

教職員・学生に向けて国連「ESDの10年」、国内におけるESDの取組、ESD自体等々の理解と浸透を図るため、「ESD銀河セミナー」と題したセミナーを継続的に開催することとした。

回	開催日	演題	講師	参加
1	2006年 10月13日 ～14日	ESD国内実施計画とGPプログラム説明会	澄川雄（文部科学省大臣官房国際課）	14 人
		ESDバザール「持続可能なつながりを作ろう」	長岡素彦（関東圏持続可能な開発のための教育の10年推進ネットワーク 事務局長）	
2	2006年 11月10日	東京学芸大学「多摩川バイオリージョンにおけるエコミュージアムの展開」	樋口利彦（東京学芸大学環境教育実践施設 教授）	55 人
		エコミュージアム日本村と「人々と植物の博物館」づくり	木俣美樹夫（東京学芸大学環境教育実践施設 教授）	
3	2006年 12月8日	森と地域と教育の再生——ドイツと日本	池田憲昭（ジャーナリスト）	60 人
4	2006年 12月18日	エジプトの社会と文化——多様性と持続性	ヒシャム・バドル（駐日エジプト全権大使）	170 人
5	2007年 3月6日	宮澤賢治が見た風景・「不思議な停車場」	ますむらひろし（漫画家）	160 人

注：肩書きは当時。

なお、第1回および第2回ESD銀河セミナーの記録は『ESD銀河レポート』第1号に、第3回および第4回ESD銀河セミナーの記録は『ESD銀河レポート』第3号に掲載・公表した。

### 3) ESDを全学共通教育の「旗印」として設定

全学共通教育を担当する教員、受講する学生が目標を共有することを目指して、国連「ESDの10年」を共通に意識することを全学共通教育の教育目標に取り入れた。

#### 全学共通教育の理念と教育目標

##### ●教育目標

全学共通教育目標は、「転換教育科目」、「共通基礎科目」及び「教養科目」によって構成され、それぞれの教育目標を設定して全学共通教育の理念の具体化を図っています。また、この三つの区分の下に、それぞれに対応する授業科目群を設けて、より具体的な教育目標を明示しています。

さらに、教育目標の達成に当たっては、国連「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development：ESD）の10年」<sup>(注)</sup>を共通に意識することに努めています。

(注) 2002年にヨハネスブルク（南アフリカ共和国）で開催された「持続可能な開発のための世界首脳会議」（ヨハネスブルク・サミット）で日本が提案して決議に盛り込まれ、同年の国連総会においても日本の提案で採決されて、2005年から開始されている世界的な教育キャンペーン。

### 4) 授業分類の導入

全学共通教育における科目間のつながりを受講する学生にわかりやすく構造化、可視化する方策として、「4つの領域」《環境（E：environment）、社会（S：society）、経済（M：market economy）、文化（C：culture）》と「4つのタイプ」《「関心の喚起」（タイプ1）、「理解の広がり」と深化」（タイプ2）、「学生参加型」（タイプ3）、「問題解決の体験」（タイプ4）》に分類する方式を導入し、2007年度のシラバスから授業科目に表示できるようにした。

### 5) ESD授業科目の公募と支援

個々の教員が授業科目にESDを織り込む取組を促進するために、全学共通教育科目を対象にESDを織り込む授業科目の公募を行い、タイプ別に教材研究や教材作成のための経費を支援した。

### 6) 「高年次課題科目」の新設

「学生参加型：タイプ3」、「問題解決の体験：タイプ4」の科目の増加を図っていくため、全学共通教育に新しく「高年次課題科目」という枠を新設して2007年度から「男女共同参画の実践を学ぶ」を1科目開講することが決まった。

### 7) 海外視察調査の実施

翌年度に開催する国際シンポジウムへの参加依頼を兼ねて、諸外国の高等教育におけるESDの取組について視察調査を実施した。これまで国内においても、ESDの取組は初等中等教育に力点があり、高等教育は未開拓な分野であった。

視察国	主な視察先	視察時期	視察団
フランス	ユネスコ本部／フランス語圏大学連 合局（AFU）／フランス文部省ユ ネスコ委員会／ボルドー第3大学	2006年 12月4日～14日	南 正昭／後藤 尚人／ パトリス・ブゴン／ 江本 理恵
韓国	明知大学／江華島干潟センター／延 世大学／清溪川／蘭芝島	2006年 12月7日～13日	牧 陽之助／家井 美千 子／小島 聡子
タイ	UNESCOバンコク事務所／サイア ム大学／チュラロンコン大学／ラ チャブルック学校／ラートブーラ ナット学校／ワットサメーダム学校	2007年 1月14日～18日	山崎 友子／渡瀬 典子 ／ジェームズ・ホー ル
イギリス	プリマス大学／キングストン大学／ 高等教育協会（HEA）／未来フォー ラム（FFF）	2007年 2月14日～23日	山崎 憲治／永野 拓矢

なお、フランスおよび韓国の調査報告は『ESD銀河レポート』第2号に、タイの調査報告は『ESD銀河レポート』第4号に掲載・公表した。

#### 8) 上田地区小中高大ESDサミットの開催

大学周辺における小学校から大学までのESD連携を目指して、上田小学校、上田中学校、杜陵高等学校、盛岡第一高等学校、岩手大学の校長、学長による上田地区小中高大ESDサミットを開催し、通学路の安全マップ作りや防災訓練の共同などについて懇談した。

上田地区小中高大ESDサミット  
日 時：2007年2月2日 10:00～12:00  
場 所：岩手大学第1会議室  
懇談事項：通学路安全マップづくり、防災訓練等

#### 9) GPフォーラムの開催

プロジェクトの社会への発信と取組の深化を目指して、小林修（愛媛大学農学部講師）、北川文美（国立教育政策研究所助教授）を招聘して、GPフォーラムを開催した。

GPフォーラム「『21世紀型市民』育成のための教育プログラム」  
日時：2007年3月16日 13:00～17:00  
場所：アイーナ（岩手県民情報センター）  
題目：「教養教育の課題とESD」  
パネリスト  
家井美千子（岩手大学人文社会科学部教授）  
小林 修（愛媛大学農学部講師）  
梶原 昌五（岩手大学教育学部助教授）  
南 正昭（岩手大学工学部助教授）  
コメンテーター  
北川 文美（国立教育政策研究所助教授）

なお、当 GP フォーラムの記録は『「21 世紀型市民」育成のための教育プログラム』に掲載・公表した。

### 10) ホームページの開設

取組の発信・普及を図るため、「学びの銀河」プロジェクトのホームページを開設した。  
(<http://esd.iwate-u.ac.jp/>)

### 11) 銀河データベースの構築

フィールドワーク等で得られた情報を蓄積していくために、銀河データベースを構築した。  
(<http://gingadb.iwate-u.ac.jp/xoops/ginga/>)

### 12) パンフレット、資料集の作成

以下のパンフレット・資料集を作成した。

名称	発行日	内容
『ESD銀河レポート』第1号	2007年 2月15日	ESD銀河セミナー第1回・第2回の記録
『ESD銀河レポート』第2号	2007年 3月15日	韓国とフランスのESD訪問調査報告
『ESD銀河レポート』第3号	2007年 5月15日	ESD銀河セミナー第3回・第4回の記録

### 13) その他

「学びの銀河」プロジェクトを新入生や新入生の保護者に伝えるための小冊子として、『岩手大学「学びの銀河」物語』を作成した。

平成18年度のまとめ
<p>この年度は、実施計画にしたがって、全学共通教育の担当者が共通に意識する対象として国連「ESDの10年」を位置付けるという学内合意を得たことが最大の成果である。銀河セミナーの開催は、ESDの内容を構成員に普及・啓発して、学内合意の下地をつくる役割を持っていた。この合意が得られたことで、「4つの領域」と「4つのタイプ」というESD科目の分類方式の導入と「高年次課題科目」という新しい共通教育科目区分も実施計画通りに導入することができた。</p> <p>この年は、次年度に計画した国際シンポジウムに向けて、海外視察調査も積極的に行った。また、GPフォーラムで活動の発信を行ったほか、ホームページやデータベースを整備し、活動の記録を『ESD銀河レポート』としてまとめた。</p> <p>さらに、全新生及び保護者に対し、プロジェクトの取組を伝える冊子を作成した。</p>

## (2)平成19年度の取組

### 1) ESD推進委員会の開催

前年度に引き続き、プロジェクトの企画・実施のため、月例でESD推進委員会を開催した。

回	開催日
7	2007年4月13日
8	2007年5月18日
9	2007年6月15日
10	2007年7月13日
11	2007年8月10日
12	2007年10月24日
13	2007年11月14日
14	2007年12月19日
15	2008年1月16日
16	2008年2月20日

### 2) ESD銀河セミナーの開催

ESD銀河セミナーを多様なテーマで継続的に開催した。

回	開催日	演題	講師	参加
6	2007年 5月11日	環境教育の進化としての ESD	佐藤真久（武蔵工業大学 講師）	50 人
7	2007年 7月13日	「強者」の政治と高等教育	山口二郎（北海道大学大学院 教授）	90 人
8	2007年 8月8日	大学生の「国語力」を語る	家井美千子〔研究会形式〕	20 人
9	2007年 10月5日	国際多文化社会における挑 戦と求められる人材	村上清（ドイツ証券 人事部担当部長／ 元 UNHCR本部人事研修部長）	60 人
10	2007年 11月16日	開発の現場からみた環境問 題—ミレニアム開発目標と UNDPの取組み—	西郡俊哉（UNDP東京事務所 広報・市 民社会担当官）	94 人
11	2007年 11月22日	環境と豊かさの両立は可能 だ—流域を近自然学でデザ インする—	山脇正俊（スイス近自然研究所 代表）	50 人
12	2007年 12月6日	持続可能な生活スタイル —アーミッシュのライフス タイルから見えること—	デイビッド・リンク・マッコーンネル（アー ラム大学SICEプログラム引率教員／ ウースター大学教授）	60 人

なお、第8回および第11回ESD銀河セミナーの記録は『ESD銀河レポート』第4号に、第10回ESD銀河セミナーの記録は『ESD銀河レポート』第5号に掲載・公表した。

### 3) ESD授業科目の公募と支援

平成18年度に引き続き、全学共通教育科目のみならず専門教育科目も対象に、ESD授業科目の開発に対して経費の支援を行った。

### 4) 国際シンポジウムの開催

前年度の海外視察調査を踏まえて、アジアの大学におけるESDの交流と連携を目指して、2007年8月30日～9月3日に岩手県立大学との共催により国際シンポジウム「持続可能な未来のための教育－アジアにおける大学の役割と連携：Education for Sustainable Future- Roles of Asian Universities and Opportunities for Collaboration」を盛岡市で開催した。

国際シンポジウム 持続可能な未来のための教育 ～アジアにおける大学の役割と連携～	
【主 催】 岩手大学・岩手県立大学	
【後 援】 岩手医科大学、盛岡大学、富士大学、岩手県国際交流協会、岩手県教育委員会、岩手県ユネスコ協会連盟、マスコミ各社	
【実施日】 2007年8月30日（木）～9月1日（土）	
【使用言語】 日本語・英語（同時通訳が付きまます）	
【会場】 ホテルメトロポリタン盛岡New Wing（8/30、31）、アイーナ（9/1）	
シンポジウム・プログラム	
8月30日（木）14:30開場	会場：ホテルメトロポリタン盛岡New Wing
15:00～17:30 オープニングセレモニー	
18:00～20:00 ウェルカム・パーティー	
8月31日（金）9:30開場	会場：ホテルメトロポリタン盛岡New Wing
10:00～12:00 セッションⅠ 環境教育からESDへ：国の政策	
コーディネーター：佐藤 真久（武蔵工業大学）／南 正昭（岩手大学）	
報告： スン・ジャンヒー	延世大学持続可能な開発研究センター教授（韓国）
蘇 竣	清華大学公共管理学院・文科建設処長教授（中国）
中島 恵理	環境省総合環境政策局環境経済課室長補佐
横井 彩	ユネスコ・バンコク事務所研究員
12:00～13:45 ランチ&ポスターセッション	
14:00～14:50 基調講演Ⅰ「持続可能な未来のために：アジアからの発信」（仮題）	
ポンチャイ・モンホンバット	サイアム大学長（タイ）
15:00～17:00 セッションⅡ 環境教育からESDへ：大学教育	
コーディネーター：佐藤 真久（武蔵工業大学）／南 正昭（岩手大学）	

報告： 高 華生 寧波大学建工学院副教授（中国）  
 ウサニ・クリトンプラサート サイアム大学国際交流部長（タイ）  
 コエム・オーラム 教育省高等教育局次長（カンボジア）  
 山崎 憲治 岩手大学大学教育総合センター教授

18:00～20:00 地域交流パーティー

9月1日（土）13:00開場 会場：アイーナ（いわて県民情報交換センター）

13:30～14:20 基調講演Ⅱ「東アジアの将来と大学間の連携」（仮題）

谷口 誠 岩手県立大学長

14:30～16:20 シンポジウム 「持続可能な未来のための教育：アジアモデルを求めて」

司会： 玉 真之介／山崎 憲治（岩手大学）

報告： パク・テヨン 延世大学大学院准教授（韓国）

趙 敦華 北京大学哲学院教授（中国）

ポンチャイ・モンホンバット サイアム大学長（タイ）

ホング・サコナ カンボジア工学院院长（カンボジア）

平山 健一 岩手大学長

16:50～17:00 閉会行事

9月2日（日）～3日（月） ESDフィールドトリップ

大船渡小学校（津波防災演劇）、気仙沼（森は海の恋人）

平泉・中尊寺

#### <国際シンポジウム実行委員会>

玉真之介 岩手大学理事・副学長  
 高塚龍之 岩手大学副学長  
 船生 豊 岩手県立大学理事・副学長  
 細江達郎 岩手県立大学理事・教育学生支援本部長  
 砂山克彦 岩手大学人文社会科学部長  
 星野勝利 同教育学部長  
 馬場 守 同工学部長  
 藤井克己 同農学部長  
 幸丸政明 岩手県立大学総合政策部長  
 佐々木隆 岩手県立大学短期大学部長  
 千葉則茂 岩手大学地域連携推進センター長  
 堀江 皓 同国際交流センター長

なお、国際シンポジウムの記録は、『国際シンポジウム報告書』としてとりまとめた。

#### 5) HESDフォーラム2007in盛岡の開催

日本の大学におけるESDを普及し、交流・連携していくプラットフォームとなるネットワーク組織の設立を目指して、2007年12月22日に「HESDフォーラム2007in盛岡：大学教育への挑戦－環境教育からESDへ－」を開催した。

## HESDフォーラム2007in盛岡

大学教育への挑戦－環境教育からESDへ－

日 時：2007年12月22日（土）午前10時半～午後5時半

場 所：岩手大学工学部「コラボMIU」会議室

主 催：岩手大学ESD推進委員会

報 告：岩手大学／環境省／北海道大学／豊橋技術科学大学／立教大学／上智大学／  
西日本工業大学／恵泉女学園大学／近畿大学／大阪工業大学／徳島大学／  
愛媛大学／富山工業高等専門学校／富山県立短期大学部／岡山大学／  
北海道教育大学（報告順）

なお、このフォーラムの記録は、『HESDフォーラム2007報告書』としてとりまとめた。また、当日の報告は、<http://esd.iwate-u.ac.jp/sem/hesd.html>に掲載した。

## 6) 国際会議への参加と海外視察調査の実施

ユネスコ・バンコクが主催する第11回APEID（The Asia-Pacific Programme of Educational Innovation for Development）に出席し、岩手大学の「学びの銀河」プロジェクトについて報告を行い、アジアの国の取組と交流した。また、ヨーロッパの高等教育におけるESDの中心的ネットワークであるコペルニクス・キャンパス（COPERNICUS-CAMPUS）の視察調査を行った。

訪問国	主な訪問先	時期	参加者
タイ	ユネスコAPEID会議	2007年 12月11日～16日	玉真之介、南正昭、 佐藤真久
ドイツ	ベルリン自由大学	2008年 3月8日～18日	宇佐美 公生

## 7) 評価委員会の開催

プロジェクトの評価と助言を得るため、学内外の有識者に評価委員を委嘱し、評価委員会を設置した。

## ESD評価委員会委員

## 学外委員

森 三紗 宮澤賢治学会イーハトーブセンター副代表  
宮野春雄 盛岡地区広域消防組合副消防長  
内田尚宏 NPO法人環境パートナーシップいわて理事  
小山田準 特定非営利活動法人北上川流域連携交流会事務局長  
重浩一郎 岩手県環境生活部環境生活企画室  
川上圭一 岩手県教育委員会  
宮 順子 岩手県国際交流協会

## 学内委員

砂山克彦 人文社会科学部長  
栗林 徹 教育学部教授  
中澤 廣 工学部教授  
広田純一 農学部教授

回	開催日
1	2007年8月10日
2	2008年3月14日

## 8) パンフレット、資料集の作成

以下のパンフレット・資料集を作成した。

名称	発行日	内容
『ESD銀河レポート』第3号	2007年 5月15日	ESD銀河セミナー第3回・第4回の記録
HESDフォーラム2007報告書	2008年 2月22日	HESDフォーラム2007 in 盛岡「大学教育への挑戦——環境教育からESDへ」の記録
国際シンポジウム報告書	2008年 3月3日	国際シンポジウム「持続可能な未来のための教育：アジアにおける大学の役割と連携」の記録
『「21世紀型市民」育成のための教育プログラム』	2008年 3月7日	2007年3月16日開催のGPフォーラム報告書

## 9) その他

この年度からプロジェクトのコーディネートを中心的に担う学術研究員として、三木敦朗氏を採用した。

### 平成19年度のまとめ

この年度は、引き続き全学共通教育にESDを織り込んだ授業科目を増やす努力と並行して、前年度の海外視察調査に基づいて最大のイベントとして8月末に国際シンポジウムを岩手県立大学と共催で開催した。韓国、中国、カンボジア、タイ4ヶ国の大学や政府関係者を招待してのシンポジウムは、学内及び県内にESDの普及・啓発を図る大きな取組であった。中国の寧波大学、タイのサイアム大学とは、ESD分野での関係が深まった。また、国内の大学間ネットワークを構築するために、HESDフォーラムを開催した。次年度の開催も立教大学と決まり、継続的に情報交換を続けていく関係を作ることができた。さらに、次年度の洞爺湖G8サミットに向けて、岩手県幼小中高大専ESDサミットの開催準備を始めたことも、この年度の重要な取組の1つである。

### (3)平成20年度の取組

#### 1) ESD推進委員会の開催

前年度に引き続き、プロジェクトの企画・実施のため、月例でESD推進委員会を開催した。

回	開催日
17	2008年4月16日
18	2008年5月28日
19	2008年6月24日
20	2008年8月1日
21	2008年10月22日
22	2008年11月12日
23	2008年12月10日

#### 2) ESD銀河セミナーの開催

前年度を引き継いで、ESD銀河セミナーを継続的に開催した。

回	開催日	演題	講師	参加
13	2008年 4月16日	大学をとり出せ!! —学生発 NPOの挑戦—	佐々木正人 (NPO法人学生ビジニティ いわて 理事長)	24 人
14	2008年 4月22日	自転車を活用したコミュニ ティづくり	宇佐美誠史 (岩手県立大学総合政策学 部 助教)	18 人
15	2008年 5月1日	中小企業、持続可能な社会 づくりに挑む。	菊田哲 (岩手県中小企業家同友会 事務 局長)	17 人
16	2008年 5月16日	子育てサポートと持続可能 なまちづくり	両川いずみ (NPO法人いわて子育てネッ ト 副理事長/事務局長)	24 人
17	2008年 5月30日	エコフェミニストの持続可 能な社会へのアプローチ	古田睦美 (長野大学環境ツーリズム学 部 准教授)	45 人
18	2008年 6月7日	平泉文化が育んだ浄土思想	山田俊和 (中尊寺 貫首)	200 人
19	2008年 6月13日	アメリカ環境文学の動向と 賢治の受容	岩政伸治 (白百合女子大学英語英文学 科 准教授)	17 人
20	2008年 8月8日	岩手大学生の日本語運用能 力 (国語力) 向上を目指す 研究会	家井美千子 [研究会形式]	11 人

21	2008年 9月2日 ～3日	報道と差別／偏見	中川克史（共同通信社編集局社会保障室長）	31人
22	2008年 10月3日	G8女性人権フォーラムの挑戦—「もうひとつの世界は可能だ」—	鈴木ふみ（すぺーすアライズ主宰／弁護士）	14人
23	2008年 10月18日	環境人材の育成と企業における環境配慮活動		46人
		(1) 「進化するCSR」とESD—持続可能な社会づくりに向けて—	向達壮吉（ナマケモノ倶楽部スローハスビジネス研究会世話人）	
		(2) 地域環境への貢献	藤原敏代（リコー東北岩手支社）	
		(3) アジア環境人材育成イニシアティブ（ELIAS）—環境人材コンソーシアムの今後の展開—	出江俊夫（環境省総合環境政策局 環境教育推進室長）	
		(4) 地球温暖化をめぐる岩手県の今後の取り組み	大島齋（岩手県環境生活部資源エネルギー課 総括課長）	
24	2008年 10月30日	アボリジニー芸術—文化的多様性のメッセージ—	ジュリア・メイ（アラム大学 助教授／SICEプログラム引率教員）	27人
25	2008年 11月14日	世界の開発問題と環境—国連機関の取り組みを中心に—	横井水穂（UNDP東京事務所 プログラム・マネジャー）	30人
26	2008年 11月14日	武力紛争・内戦における虐殺を裁く—国際刑事裁判の挑戦—	古谷修一（早稲田大学法科大学院 教授）	26人
27	2008年 11月28日	「日本人」とは何だろう—アメリカ系日本人から見た過去・現在・未来—	有道出人（北海道情報大学経営情報学部 准教授）	40人
28	2008年 12月12日	水資源利用のサステイナビリティ	伊藤達也（法政大学文学部 教授）	27人
29	2008年 12月17日	環境調和型の大学をつくる—環境マネジメントシステムの実践—	倉阪秀史（千葉大学法経学部 教授）	67人

なお、第13回および第14回・第16回ESD銀河セミナーの記録は『ESD銀河レポート』第5号に掲載・公表した。

### 3) 新しいESD科目の新設

ESDの全学共通教育科目として、新しく1、2年生向けの新規科目、3、4年生向けの高年次課題科目が開講された。

ESD科目として新設されたもの	担当(代表者)	開講	ESD	備考
健康のセルフコントロールと社会参加	立身政信	後期	S 4	
持続可能なコミュニティーづくり実践学	山崎憲治	前期	MES 2	
地元企業に学ぶESD	山崎憲治	後期	MES 2	
男女共同参画の実践を学ぶ	海妻径子	集中	SCM 4	高年次
都市の自然再生プランニング	橋本良二	前期	CE 4	高年次
北上川流域学実習	牧陽之助	集中	E 3	高年次

### 4) 岩手県幼小中高大専ESDサミットの開催

岩手県内の幼稚園から大学、専門学校まで、校種・公私立を越えて、園長・学校長・学長が環境と教育について語り合う場として、岩手県幼小中高大専ESDサミットを企画し、いわて5大学学長会議と共催で開催した。

岩手県幼小中高大専ESDサミット	
日 時	2008年7月5日(土) 10:30～16:30
場 所	岩手教育会館大ホール
主 催	岩手大学・いわて5大学学長会議
共 催	岩手県国公立幼稚園協議会・(社)岩手県私立幼稚園連合会・岩手県小学校長会・岩手県中学校長会・岩手県高等学校長協会・(社)岩手県私学協会・(社)岩手県専修学校各種学校連合会
後 援	文部科学省、環境省、日本ユネスコ国内委員会、岩手県、岩手県教育委員会、岩手県市町村教育委員会協議会、岩手県国際交流協会、ほか
呼びかけ対象者(参加予定者)	県内の幼稚園長、小学校長、中学校長、高等学校長、高等専門学校長、特別支援学校長、大学学長、専門学校・各種学校長ほか、教育関係者、一般市民
タイムスケジュール	
10:00	開場・受付
10:30～11:00	開会行事 主催者挨拶 岩手大学長 藤井克己 来賓挨拶 達増拓也知事ほか
11:00～12:00	記念講演 I 「レイチェル・カーソンと宮沢賢治」 レイチェル・カーソン協会理事長 上遠恵子

12:00 ~ 13:00	昼食
13:00 ~ 14:20	記念講演Ⅱ「フィンランドの教育とESD」(英語・逐次通訳) フィンランド・センター所長　ヘイッキ・マキパー
14:20 ~ 14:30	休憩
14:30 ~ 16:15	パネルディスカッション：環境と連携をテーマに岩手の教育を語る 及川幸彦(気仙沼市立中井小学校教頭)／阿部治(ESD-J理事長・立教大学教授)／近藤聖(葛巻町立葛巻小学校長)／高木浩一(岩手大学准教授)／平山健一(岩手大学前学長)／上遠恵子(レイチェル・カーソン協会理事長)
16:15 ~ 16:30	閉会行事

### 5) 第1回岩手県幼小中高大専ESD円卓会議の開催

岩手県幼小中高大専ESDサミットの際に設立された岩手県幼小中高大専ESD円卓会議の第1回を2009年1月9日(金)に開催した。

第1回 岩手県幼小中高大専ESD円卓会議開催要項	
開催日時	平成21年1月9日(金) 15:30 ~ 17:20 (17:30 ~ 19:00交流懇親会)
開催場所	サンセール盛岡
参加者	円卓着席者：各団体の代表者(各2名) 自由参加者：各団体構成員、一般等
15:00 ~	受付開始
15:30 ~ 15:50	開会行事 幹事会からの経過報告 要項等の再確認 議長、副議長の選出 他
15:50 ~ 16:30	8団体からのトピック紹介(各団体5分)
16:30 ~ 17:10	協議 ①校種、公私立を越えた共同行動について ②第2回ESD円卓会議について
17:10 ~ 17:20	閉会行事
17:30 ~ 19:00	交流懇親会

### 6) 海外視察調査の実施

弘前大学、岩手大学、秋田大学の北東北3大学の連携を活用して、大学間連携並びにESDについて先進的に取り組むスウェーデン・フィンランドを訪問し、バルチック・ユニバスティー・プログラムを中心に視察調査を行った。

**■ 調査団の構成**

- 団 長 玉真之介（岩手大学理事・副学長）  
副団長 須藤新一（弘前大学理事・副学長）  
関 聖一（秋田大学学務部長）  
団 員 石堂哲也（弘前大学人文学部長）  
後藤尚人（岩手大学准教授）  
南 正昭（岩手大学准教授）  
江本理恵（岩手大学准教授）  
金子百合子（岩手大学准教授）  
石沢友紀（岩手大学国際交流課主任）

**■ 調査日程と面会者**

- 9月21日（日）日本→ストックホルム（スウェーデン）  
9月22日（月）ストックホルム  
訪問先：JSPS Stockholm office  
面会者：毛利るみこ（Deputy Director）  
訪問先：Royal Institute of Technology  
面会者：Yoko Takaku Drobin (Manager, Japan related projects)Lennart Nilson  
(Lecturer, Energy and Environmental Technology)Carl-Axel Engdahl (Associate  
Professor, Applied Information Technology)  
9月23日（火）ストックホルム→ウプサラ→ストックホルム  
訪問先：Uppsala Centre for Sustainable Development,Uppsala University  
面会者：Christine Jakobsson (Director, The Baltic University Programme)Ingrid  
Karisson (Senior Advisor, The Baltic University Programme)  
9月24日（水）ストックホルム→ヘルシンキ  
訪問先：Ministry of Education in Finland  
面会者：Ilkka Turunen (Special Government Adviser, Division of Higher Education and  
Science)  
9月25日（木）ヘルシンキ→トゥルク→ヘルシンキ  
訪問先：Centre for Continuing Education, Abo Academy University  
面会者：Paula Lindroos (Director, Centre for Continuing Education)  
Sinikka Suomalainen (Planning Officer)  
Ea Maria Blomqvist (Educational Planner)  
Peter Fagerstirom (Environmental Planner)  
9月26日（金）ヘルシンキ  
訪問先：Faculty of Behavioral Sciences, University of Helsinki  
面会者：Juhani Hytonen (Head of Department of Applied Sciences of Education)  
9月27日（土）ヘルシンキ発  
9月27日（日）帰国

## 7) 評価委員会の開催

前年度に引き続き、評価委員会を開催した。

回	開催日
3	2009年3月27日

## 8) パンフレット、資料集の作成

以下のパンフレット・資料集を作成した。

名称	発行日	内容
『ESD銀河レポート』第4号	2008年 5月19日	ESD銀河セミナー第8回・第11回の記録／タイESD訪問調査報告／学内でのESD科目実践例
『ESD銀河レポート』第5号	2009年 3月31日	ESD銀河セミナー第10回・第13回・第14回・第16回の記録

## 9) その他

「学びの銀河」プロジェクトから広がって、2008年6月には、国連大学高等教育研究所が中心となって進めているProSPER.Net(Promotion of Sustainability in Postgraduate Education and Research Network)に大学として加盟した。また、11月には、日本ユネスコ国内委員会及び宮城教育大学が中心となって進めているユネスコ・スクール支援大学間ネットワークに加盟した。

### 平成20年度のまとめ

この年度は、全学共通教育にESDを明確にした新しい授業科目が開設された。また、領域とタイプをマークした授業科目も全学共通教育・専門教育の両方で増加した。ESD銀河セミナーが頻繁に開催されたのも、今年度の特徴である。

ESDは、目標の共有とつながりの可視化を目指す取組であり、それは大学内にとどまるものではない。今年度は、岩手県内の幼稚園から大学・専門学校まで、というコンセプトの下にサミットの開催に岩手大学が貢献できたこと、また、幼小中高大専の連携が円卓会議として継続できるようになったことが一番の成果である。そこでは、ESDと真の学力の向上というテーマをいかに結びつけていくかが焦点である。

高等教育政策においても、「連携」が焦点となってくる中で、スウェーデン・フィンランドの大学間連携に関する視察調査は、北東北3大学における教育連携に示唆的なものであった。

以上